

いっしきあおかい
一色青海遺跡(本発掘調査B)

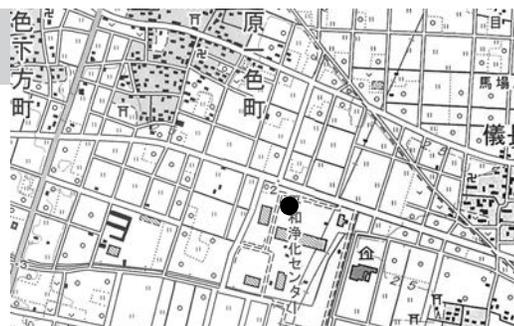
所在地 稲沢市一色青海町地内
(北緯35度14分10秒 東経136度45分20秒)

調査理由 日光川上流流域下水道事業

調査期間 令和元年5月～令和元年10月

調査面積 1,800㎡

担当者 樋上 昇・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「津島・清洲」)

調査の経過 調査は愛知県建設局下水道課一宮建設事務所による日光川上流流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて令和元年5月から令和元年10月にかけて実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地であり、近代の耕作土および床土を除去した1面目として平安時代～江戸時代までの遺構を扱い、1面目の遺構除去後に検出される弥生時代中期後半の遺構を2面目として扱っている。調査面積は1,800㎡である。

立地と環境 一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道自然堤防上に位置している。遺跡周辺の現況は、点在する集落以外は水田や耕作地として整備され、区画整理も進んでいるため、旧地形が窺える場所は無い。現況の遺跡周辺の標高はわずかな差であるが、北より南が低く、東より西が低い。

地下水位は高く、標高0.5m以下では湧水が発生する。現代の水田耕作土底面の高低差にも影響されるが、遺構検出面は標高0.2m～1.0m付近に位置するため、調査には常時排水設備が必要となる。

調査区周辺では、大規模な攪乱を受けている部分もある。攪乱に投棄されたゴミの年代から、浄化センター建設と同時期に掘削された攪乱も確認された。

調査の概要 過去の調査結果から、一色青海遺跡では北西から南東に流下する旧河道が2009年度調査区内で北東に向きを転じ、2018年度調査区中央を北に抜ける状況が検出されている。今年度の調査区は集落中心部の北に位置し、調査区の西端と南東端に旧河道と大溝が検出されることが想定され、ほぼ想定された位置に旧河道、大溝は検出された。

その一方で、集落部分を挟んで旧河道の対岸部分に当たる今年度の調査区中央部分は遺構が希薄で、建物跡や方形周溝墓は検出されておらず、居住域や墓域としての利用は行われていなかったことが判明した。

また、弥生時代に耕作地として利用された可能性を探るため、複数の弥生時代の溝や堆積土と考えられた土壌サンプルを採取しプラントオパールを検出を試みたが、検出されなかったことから、本調査区周辺で耕作が行われた可能性は低いと考えられる。

1面の遺構(中近世) 1面目の遺構は調査区北半部で多く検出された鎌倉～室町時代の土坑(方形土坑)が主なものであり、長辺が2mを超えるものは5基検出された。大型のものは011SK、025SKがあり、011SKは長軸3.8m、短軸2.6m、深さ0.7mを測る。遺物は弥生土器破片も検出されたが、中世に掘削された際に包含したものと考えられる。

2面の遺構(弥生時代中期後半) 弥生時代の遺構は、大溝と旧河道が主で、大溝は調査区西端部で200SD、600SD、旧河道は調査区東西両端で400NRが検出された。200SDから400NRまでの断面を精査するために、調査区西半部に流路に直行する畔を設けた。断面観察による重複関係から、こ

の地に弥生時代中期後半の集落が構えられた最初期に400NRが存在し、400NR埋没後に600SDが新たに掘削され、600SD埋没後に200SDが改めて掘削されたことが断面観察より判明している。これらの遺構は全て弥生時代中期後半に属し、既出の居住域や墓域と並存したことが確認されている。各々の遺構の規模は断面部分で200SDが幅7.79m、深さが1.8m、600SDが幅6.23m深さ1.7m、400NRは幅21.73m深さ2.2m以上である。

出土遺物は過去の調査に比べると点数は少なく、特に状態の良いものは、土器は完形の細頸壺1点、木製品は組合せ鋤1点、板材1点等がある。

200SDの埋没後は、浅い082SD(自然流路・055SD、054SDも同様)が蛇行しつつ流れていた。埋土は特徴的な灰白色のシルトと黒色シルトの互層で、灰白色のシルトは広域に広がる洪水堆積層と考えられている。同じ埋土は2018年度調査区の方形周溝墓の周溝最上層、あるいは200SD最上層部に確認でき、当初は200SDの最上層(最末期)にこの埋土が含まれると考えたが、今年度の調査では、200SDと600SDにまたがる状態で082SDが検出されたことから、200SD埋没後の近い時期に堆積した別の遺構(自然流路)と判断した。この埋土の植物珪酸体の分析により、082SD(055SD、054SD)には生活排水を含まない清流が流れていたことが明らかとなった。

**断面に見
える地
震の痕跡**

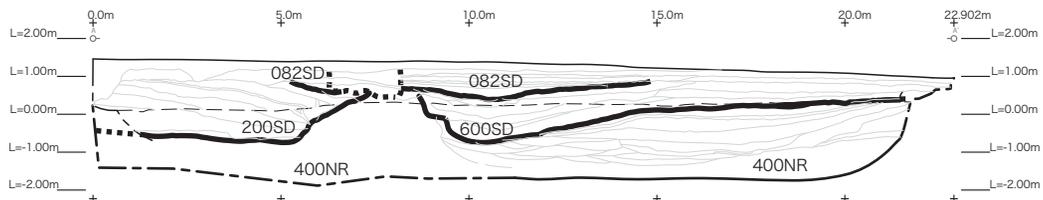
断面観察によると、200SDと600SDの境界付近を中心に地震による影響を強く受けた状況が観察された。地震による影響が観察されるのは、液状化、流動化、砂脈、噴砂がある。性質上最も影響を受けるのが堆積中の砂質であり、液状化の際に強力な浮力を持つことで、周囲の層を変形させるなどの現象も起きている。200SDと600SD境界部分は、400NRが埋没した部分であり、200SD、600SDに比べて砂の堆積が多いことも原因と考えられる。

その他、030SKは炭化物と弥生土器の破片を多く検出した土坑である。平面形は楕円状であり、同様の遺構は、2018年度調査区の234SK、273SKがある。

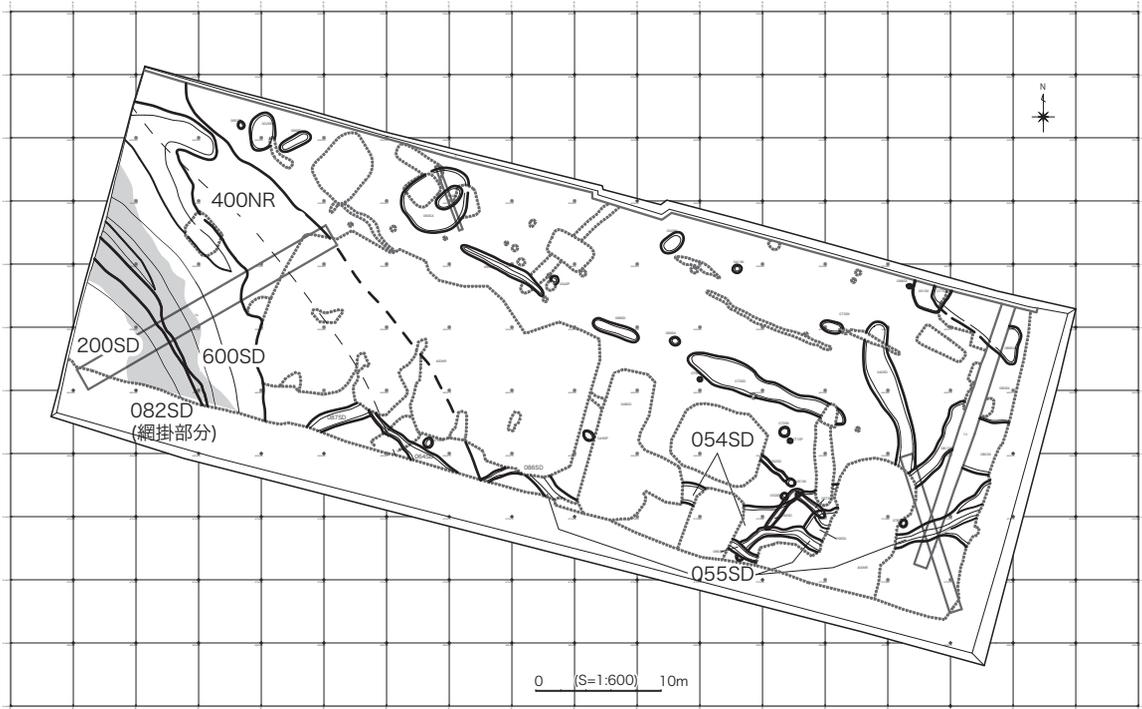
ま と め

2018年度の調査成果から、200SD最上層や方形周溝墓周溝最上層に見られる洪水堆積層は、一色青海遺跡に営まれた集落が洪水等によって居住が困難となった結果、廃絶した可能性を示すと考えた。しかし2019年度の調査では、これらの洪水堆積が200SDの上層には含まれず、200SDや600SD埋没後の別の遺構082SD等として検出され、先述の通り生活排水を伴わない清流であったことが判明した。洪水堆積層が堆積した時点ですでに集落が存在していなかった可能性が大きい。当然ながらこの時点では大溝や河道はすでに埋没しており、集落の生業に大きく関わる運河としての大溝(200SD・600SD)、河道(400NR)の存否が集落の存続に直結していた可能性も考えられる。集落存続中は400NRの埋没に伴って600SD・200SDが改めて掘削(浚渫)され大溝の機能が維持されたのに対し、200SD埋没後の時点では集落よりも上流部での流路の変化や水量の減少によって大溝の機能が維持できなくなったと思われる。

(鈴木恵介)



082SD、200SD、600SD、400NR断面図(S=1/200)



一色青海遺跡 2019年度調査第2面 (弥生時代中期) 遺構配置図



一色青海遺跡 2019年度調査第2面 (弥生時代中期) 完掘状況写真



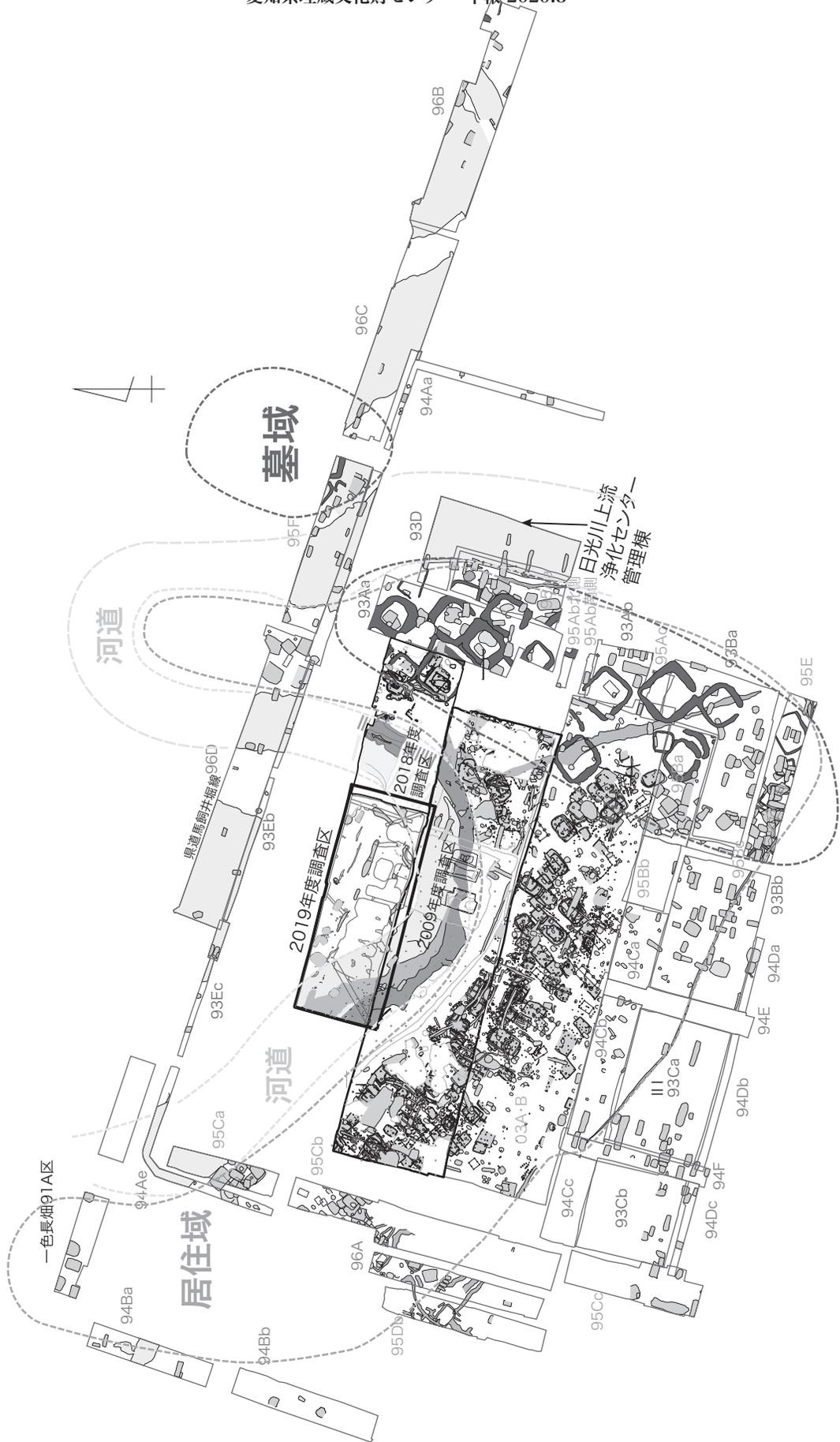
004SK断面 (古代～中世)



400NR 出土板材 (弥生時代中期)



400NR 出土細頸壺 (弥生時代中期)



一色青海遺跡集落模式図(弥生時代中期後葉 S=1/2,000)